





氷花の詩

中村眞一郎

氷花の詩

定価 一〇〇〇円

昭和四十六年六月三十日 第一刷

著者 中村眞一郎

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二の一八
電話代表(二六四)〇三四六
郵便番号一〇一 振替東京七七五七

印刷所 稲葉印刷株式会社
製本所 美成社製本株式会社

著者との話し合いにより検印省略

氷花の詩
目次

A

立原道造―優しき歌

ブルースト雑記

『幻の国』について

高見順

わたしの古典

椎名麟三・人と作品

神西さんと堀さん

旧刊紹介

ネルヴァール

私の机の上

黒の幻想

春の日の夢

五月という月

音楽と文学

『リアンヌの気紛れ』

『万葉』と家持

文学のひろば

原田義人

我が愛する家持

高見さんと伊藤さん

油壺

B

84	81	79	74	71	67	65	62	59	58	56	56	54	51	48	47	41	32	31	28	11
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

C

『去年マリーエンバードで』	93
批評について	96
ホテルの高見さん	98
古代からの贈物	101
悲しい思い出	103
老碩学と英文壇	105
『古今集』の歌一首	109
ラシーヌと『城』と日本演劇の未来と	111
『昼顔』讃	112
批評の面白さ	114
『朱雀門』と『キスマット』	119
建築家兼詩人の思い出	121
宇佐の幻想	129
十一世紀を旅した時代	131
さそり座『夏』	133
私の動物記・猫	136
私の書齋	138
私の仕事の掘りどころ	140
誤植の話	141
紫式部	143
金の苦勞	150

D

- 騒音禍
初めての北海道
革命の前と後
巻頭言一束
豚に真珠
『黙坐消遣集』のこと
ジロドゥーと『四季』
私の中の古典・江戸の漢詩
倉敷市
道造さんと私
水上勉さんとの交友
青年座『夜明けに消えた』
生きがいについて
わが一高時代
氷花の詩
賭け禁止
神秘劇の演出者
東京・マールイ・戸板君
椎名さんの世界
北海道ふたたび
文学博物館から

E

- 風巻さんと北海道
文学の地理学
夫婦が人生のすべてではない
ゴーギャン展から
『源氏物語』
深草瑞光寺
大学過眼
街あるき
二人の高橋
椎名さんの芝居
作家小田実誕生神話
辛辣な一語
鈴木信太郎先生の回想
『人間として』編集同人諸君と私
コレットと山崎と私
私の夏
渡辺先生と私
『冒険・藤堂作右衛門の』
慰めとしての芸術
夏の終り
本好きのこと

311 307 305 304 300 298 295 286 282 280 277 275 272 265 261 260 252 250 247 243 238

皿のうえの一匂

二つで一つの「恥」

黒谷あたり

純粹者・加藤道夫

酷暑妄語

『なよたけ』雑感

『煉獄エロイカ』と吉田喜重

フランス映画とわが青春

ルイ王朝の華・ヴェルサイユ宮

江戸の漢詩人たち

尾道と竹原

夢を貫いた青春群像

矢代静一のこと

女性は誰のために着るか

機械と私

小島信夫の想い出

あとがき

中村眞一郎著作目録

371 369

365 362 355 352 348 345 341 338 335 333 328 324 323 320 315

氷
花
の
詩

装
幀

川
島

勝

A

Ⅰ 立原道造

— 優しき歌

一九三八年の新春、私は往年の『谷の遊び場』の小説家から、雑誌『未成年』の同人になることを薦める葉書を貰い、早速本郷の下宿を訪ねた。未だ床の中にいた杉浦明平の枕許には、ルネッサンス・ヒューマニズムに関する老大な文献が積まれてあった。優しい想いを内に秘めた辛辣無類の自由の闘士、われわれのハイネ、としての強靱な背骨を鍛えつつあったこの学者は、眠そうに起き上ると、ミラノの古本屋のカタログをいじりながら、立原道造が私の詩を認めているということ、『未成年』に参加させるのも詩人の意見であること、同時に私の小説には、市民的小説家トーマス・マンの明哲な分析力と形象力とが見出される、というような、少年の私を大変に嬉しがらせ自惚れさせる意見を聞かせてくれた。

当時の立原道造は若い一高生である私にとって、最も手近な先輩詩人であり、同時に最も大きい星として注目の的だった。幾篇かの清新なソネットで私を感動させた詩人は、更にその頃『文芸』に『鮎の歌』を発表することによって、散文によっても私達の世代の精神状況を造形すること

に、新しい地平線を開いた。その小説は、当時『文学界』の文芸時評の欄に拠って新しい描写理論を形成しながら全文壇に宣戦布告をしていた、新進小説家高見順の痛烈な攻撃の的となった。

当時の若い文学的世代は、左右両翼に二つの行動的な前衛、『人民文庫』と『日本浪漫派』とを持ち、その中間には懐疑的な知性の重圧の下に、自らの生の可能性を滅ぼしている、広い層を持っていた。二十歳を越したばかりの私は、年齢から来る鋭敏さに過度に痛めつけられながら、美と人間性とをその中から救い出そうとして、凡そ想像し得るかぎりの惨めな詩を、ほんの僅かばかり書き、それを発表すると同時に、激しい自己嫌悪の中で自ら忘れ去ろうとした。それらの中の『敗北の歌』という散文詩は、侵略戦争を始めたばかりの日本の政治への抗議として理解されたために、意外な賞讃と監視とを受け、又、それらの中の一筋には、立原道造を当面の敵としている高見順に捧げたものも混っていた。『故旧忘れ得べき』の小説家は『人民文庫』に属し、『萱草に寄す』の詩人は『日本浪漫派』に好意的である、と漠然と理解していた私は、私の方らの秘かな尊敬にもかかわらず、詩人が私の仕事を認めてくれようなどとは到底信じられなかった。私は自分自身の詩の芸術的な価値は余り高く評価していないこと、自分の中に燃えているヒューマニストとしての情熱を、定着する形式を発見出来ないでいる、従って自分は寧ろ詩を捨てようと思う、というようなことを杉浦に語った。

ところがそれに答えるように、引続いて数篇の立原の手紙が、私の寄宿寮の孤独を訪れた。それは或る時は私の健康に対する親切な配慮であり（杉浦の勧告を容れて、同氏の故郷である愛知

の海岸へ春休みを過しに行くようにといった具体的な)、又或る時は私の貧しい作品の中にある、人生への愛を大事に失わないでいるようにとの好意に満ちた忠言だった。それ等の手紙に一貫する特徴は、当時の若い世代の或る層の持つ傾向、病氣に対する、そして病氣を通して、即ち生からの不在を通しての純粹化、への偏向と、それに伴う非人間的唯美主義、からの脱出への詩人自身の苦悶を示していた。それを立原は「健康を獲よ」と忠告し、「独語から対話へ」と定義付け、『抒情小曲集』より『愛の詩集』を選ぼうと提言することによって明らかにした。

私は立原道造の中に、いわゆる立原風の世界を超えて、新しい人間が誕生しつつあるのを漠然と感じ、それが私の道への新しい地平線を開くかも知れぬという予感を擲みながらも、私自身の問題の追求と時代の絶望的な暗さとの中で夢中になっていて、この好意ある先輩自身の動こうとする姿勢を、はつきりと見つめる余裕はなかった。

間もなく大学のフランス文学科へ入学した私は、『未成年』のこの二人の先輩は寧ろドイツ文学を学ぶことを薦めてくれたのだったが引移ったばかりの私のアパートで、差出人のない本包みを受取った。それは数冊のフランス・ジャムの詩集だった。私はこの好意に満ちた無名の呼び掛けに心が躍った。救いようもない暗い日々の中で、そうした贈物は私の始まるうとしている多難な大学生活への炬火とも感じられたから。併し一体この贈主は誰だろう？ 私には見当もつかなかった。

それから一週間程して、見慣れた固い筆跡の詩人の葉書が舞い込んだ。「大学入学のお祝いに、

ジャムの詩集を受取って下さい。僕が数年前、中学生のようにおぼつかないフランス語で読んだものです。ジャムは僕にとってリルケへの窓でした。……」

私は早速その葉書の住所へ飛んで行った。長身の詩人は高い三階のアチックの小部屋の手製の木の椅子に坐っていた。入口の扉には白いアート紙に朱で刷った *Aubade et Nocturne* という言葉が読まれ、その下には斜に *Bar Copenhagen* と書いた紙片が見られた。春の宵の薄闇のなかに灯された古風なランプの下で、詩人は出来上ったばかりの風信子叢書第二篇の『暁と夕べの詩』の特製本のカットに、子供が塗り絵をするように、水絵具で彩色を試みていた。「これはハンス・カロッサに送るんですよ。芳賀檀がドイツ訳してくれて。」詩人の背後の棚には詩集が並び、その傍らには洋酒の瓶が光っていた。「君、沢西健と一緒にヤコブセンの『ニールス・リーネ』を翻訳しなさい。『コギト』に載せるんだ。……」

「僕も子供の時は、建築家になるつもりだったんです。」私は明るい立原の視線の前で無邪気に告白的になっていた。「石本喜久治さんがヨーロッパの旅から帰って出した分離派建築の写真集は、僕の少年時代の一番好きな本だったんです。建築中の白木屋の前を通る度に、早く足場が外されなかなあと待ち兼ねたんですよ。あの白い汽船みたいなスマートな建物の想像図を、小学生の僕は勉強部屋の壁に張って置いたものです。」「おや、僕もこの四月から石本さんの建築事務所所に入るんだよ！」私はそんなことから愈々立原が身近に感じられて来た。私が最初に知った詩人の生活は、書物の上で詩を読んで感じていたものよりも、遙かに強烈にその周囲の世界を、一つの自分の宇宙に変えていた。どんな家具の一つも、どんな抽象的な理論も、立原の周りでは、